

2023 年度地域協働フィールドワーク 活動報告書



2024 年 2 月発行

目次

- p.1 はじめに
- p.2 メンバー紹介
- p.3 4～6月準備
- p.5 事前訪問
- p.7 事前訪問を踏まえて本訪問の準備
- p.8 本訪問
- p.9 本訪問一居酒屋てん
- p.11 本訪問一交流スペースてん
- p.13 本訪問一アンケート
- p.14 本訪問一高校調査
- p.16 本訪問一PR 動画の作成
- p.18 本訪問を踏まえて
- p.19 おわりに

※表紙の写真は、8月の本訪問初日に「てん」の前で撮影した写真です。

はじめに

この活動の母体は、北海学園大学経済学部を学生を対象とした特別講義「地域インターンシップ」です。地域インターンシップは2016年度に始まり、私たちの先輩が天売島を訪れました。島民の方々と交流を深める中で離島独特の地域性や天売島が抱える問題を知り、自分たちが天売島に何をすることができるかを考えました。この時考え出されたものが、天売島での暮らしや仕事を次世代に伝えていくための書籍を作ること、当時天売島の空き店舗を再活用することでした。

2020・2021年度はコロナウイルスの蔓延の影響を受け、天売島に訪問して私たちの考えた企画を行うということが叶いませんでした。札幌にいる状態でも少しでも天売島を知ってもらえるよう、レンタルスペースてんのWebサイト作成や、食料支援への食料提供などをメインに活動しました。

2022年の活動ではようやく従来の型である、事前訪問・本訪問という2回の天売島訪問が叶いました。実際に天売島を訪れ、レンタルスペースてんの活用を行うとともに、天売島にある間伐材を活用したベンチ作り・修復を行いました。

2023年度は、コロナ禍を終えて活動を再スタートした1年でした。天売島ではコロナ以前に行われていた巖島神社祭が復活し、事前訪問でお祭りのお手伝いを行うことが出来ました。本訪問では、日中の活動である交流スペースてんや夜の活動である居酒屋てんの活動を通して、島民の方々と深い交流を行うことが出来ました。また今年度は本講義とは別に、北海学園大学全学生が対象である「にぎわいプロジェクト」という活動が開始し、7月にも北海学園生が天売島を訪れる機会が生まれました。地域協働フィールドワークとにぎわいプロジェクトではメンバーが異なるものの、メンバー間のお互いの活動について共有や協力を行うことで、刺激を受けながら活動をおこなうことが出来たと感じます。

この報告書では、今年度のメンバーが揃った4月から1年間の活動を報告させていただきます。本講義は、2022年度受講生から2年連続の受講を前提に活動を進めてまいりました。1年の報告のみではなく、昨年からの繋がりや来年の活動に向けての考えなども報告出来るよう努めました。

最後になりますが、プロジェクトをご支援頂いた天売島おらが島活性化会議様、天売島島民の皆様、北海道エンブリッジ様、地域協働フィールドワークに関わる北海学園大学経済学部、に感謝申し上げます。

2023 年度 北海学園大学地域協働フィールドワーク
経済学部地域経済学科 3年
原田悠里

メンバー紹介



3年 原田悠里



3年 佐藤旭



3年 高見海晴



2年 大弓叶多



2年 齊藤百花



2年 西田亮太



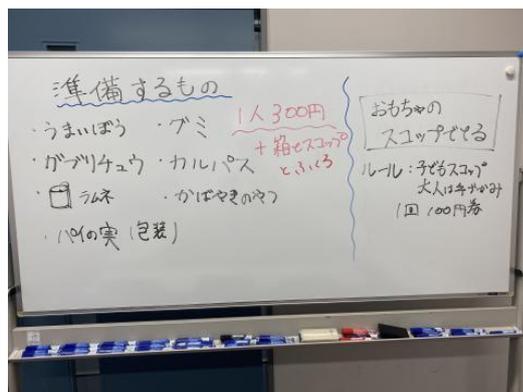
2年 山本幸一

4～6 月準備

事前訪問までのスケジュールは以下の通りである。

月	日	内容
4月	26日	メンバー初顔合わせ
5月	10日	天売島なんでも調査レポート発表会 5グループ2ペアに分かれて天売島の生態系などについて調査
	17日	スタートオリエンテーション 講師：北海道エンブリッジ 浜中裕之さん メンバーごとにこの活動での目標設定を発表
	24日	6月訪問のスケジュール確認報告 6月訪問と8月訪問でやりたいこと、浜中さんに聞きたいこと整理
	31日	浜中さんとオンラインで意見交換 メンバーのこれからの活動方針をここで決定 結論「やりたいことを通して島のためになることをしたい」
6月	3日	コワークとにぎわいプロジェクト合同懇親会 ここで初めて7月メンバーと交流
	7日	個人的にやってみたいプロジェクト発表 その後6月と8月の活動方針をまとめた 6月：お菓子つかみとり、アンケート、動画撮影 8月：駄菓子屋、お祭り、お酒
	14日	6月の宵宮祭で出店する際に持っていくものを決めた (小分けされた小さなグミやおもちゃのスcoopなど) 島民にアンケート調査をおこなう際に聞きたいことをまとめた

6月14日のホワイトボード→



4月26日の顔合わせから、私たちは6月・8月の事前訪問・本訪問に向けて打ち合わせを行ってきた。メンバーのほとんどが、天売島について何も知らない状態からスタートしたので、まずは天売島について調べたものを資料にまとめて発表するという活動から始まった。

次に、島での自分の目標を設定し、自分たちがやりたいことを発表し合った。月末にはやりたいことを明確化し、プロジェクトの方向性についても話し合った。

6月に入ってから、7月に天売島を訪れる「にぎわいプロジェクトメンバー」と合流し合同懇親会を行って親睦を深めた。また、一人一人のやりたいことを決定し、本訪問で何をしたいのか、そのために事前訪問で何をしておくべきかを話し合い、宵宮祭で行うお菓子つかみ取りイベントで準備するものを決めた。

事前訪問の準備で一番苦勞したのが、プロジェクト全体の方向性についてで、メンバーの意見がバラバラでうまくまとめることが出来なかった。その反面、アイデアをメンバー一人一人持っており、それを打ち合わせで意見することで、プロジェクトでの活動に活気が満ちていったように感じた。



宵宮祭「お菓子つかみとり」



巖島神社祭の様子

事前訪問

日程：6月17日(土)～6月19日(月)

6月17日(土)

9:30	大学出発、貸切バスで移動
12:30~13:30	羽幌町にて昼食・その後周辺を散策
14:00	羽幌フェリーターミナル発
15:35	天売島着
16:00	宵宮祭の手伝い・出店
17:30	宿での夕食
19:30	懇親会

6月18日(日)

終日	巖島神社祭り
夜	祭りの打ち上げ

6月19日(月)

8:30	「おろろんサイクル」からレンタルした自転車で島一周
11:30	「炭火海鮮 番屋」で昼食
12:00	「海の宇宙館」見学
12:30	「てん」下見・坂本学さん（天売島おらがしま活性化会議メンバー）と本訪問についての打ち合わせ
16:00	天売島フェリーターミナル発
17:30	羽幌フェリーターミナル着、貸切バスで移動
22:00	大学着



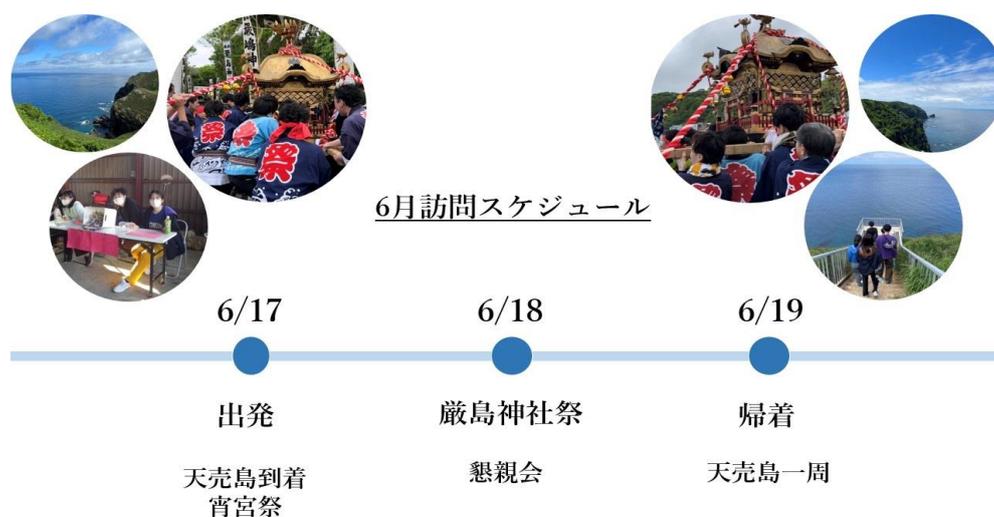
おろろんサイクル

6月の事前訪問では、天売島に向かう途中、フェリーに乗り慣れていない何人かのメンバーが体調を崩すなどのハプニングがあったが、宵宮祭までには何とか回復し、お菓子のつかみ取りイベントを無事開催することができた。祭りには多くの島の子供たちが集まってお菓子のつかみ取りに夢中になった。夜に行われた懇親会を兼ねた宵宮祭の打ち上げでは、島民の方々が私たちを暖かく迎え入れてくださり、島民との親睦を少しだけ深められたような気がした。

2日目の本祭では、朝から夕方にかけて神輿を担ぎ、何度か休憩を挟みながら天売島内を練り歩いた。何時間も担いだ神輿を置いたときに達成感と、一緒に担いだ人達との一体感が生まれたと思った。本祭の打ち上げでは、初日以上に島民との親睦を深められたと思う。

最終日は、自転車をレンタルして天売島を一周した。道中で海鳥の群れを見たり、海鮮丼を食べたり、お土産を買ったりするなど、一日で天売島を堪能することができた。また、本訪問で活用する「てん」の下見に行き、どのように活用していくか実際に目を通して考えることが出来た。

天売島の特色や雰囲気を知ることができ、本祭を通してメンバーとの一体感が生まれ、本訪問で自分たちがしたいことが明確化できたので、この事前訪問は、8月に本訪問としてもう一度訪れる私たちにとって、とても有意義なものになったと思う。



事前訪問を踏まえて本訪問の準備

6月に行った天売島の事前訪問で、島内の状況を確認したところ、夜間に開いている飲食店が存在しないことや、天売島に関する情報がインターネット上で不足していることが分かった。この課題に対処するため、本プロジェクトのメインイベントとして、交流スペース「てん」を活用し、島民と観光客との交流を促進するプロジェクトが立ち上げられた。

具体的には、交流スペース「てん」を利用し、夜間に飲食イベントを開催し、地域の人々と観光客が交流できる場を提供することが決定した。同時に、プロジェクトの一環として、PR活動やアンケート調査を行うことを計画し、地域社会との連携を強化しながら天売島の魅力を広く知ってもらうための活動が進められた。

また、本訪問までの2か月間という限られた期間で効果的に活動するために、具体的な行動計画と、話し合いの中で何を話し合うのかを明確にした。その中で、飲食イベントを具体的なものとするために、本プロジェクトとは別に活動している「賑わいプロジェクト」で行われる7月の天売島内での飲食イベントに、大弓、齋藤、山本が同行することが決まった。

7月の訪問では、訪問の目的と達成目標においてメンバー間で方向性のズレがあり、不安定であった。そのため、活動の具体的な計画や目標設定を改めて重要視し、全メンバーが一致した方針を確認する機会となった。そこで、7月の反省会を踏まえた現状の案の見直しを行った。話し合いの中では、目的や目標の一致を確認し、具体的な計画と柔軟性を備えたコミュニケーションを重視することで島民や観光客との会話の場面を作ることに繋がると考えた。具体的には、店内の配置を再検討し、学生間と島民・観光客とのコミュニケーションを円滑にするよう調整し、観光客・島民・学生の会話の機会を増やすことを意識した。また、手書きで行っていた会計をデジタル化するなど、注文や提供にかかる負担を軽減し、スムーズに活動を行えるようにした。



本訪問

日程：8月10日(木)～16日(水)



本訪問では、8月13日～15日の3日間行った夜の活動「居酒屋てん」とその周知のためのポスター配りを全体活動とした。また個人の興味に合わせて個別活動も行った。

- ・昼の間も「てん」を開ける「交流スペースてん」
- ・てんを中心に観光客と天売島の間を調べる「アンケート」
- ・天売高校の魅力を広げる「高校調査」
- ・TikTok や YouTube を通して天売島の魅力を広げる「PR 動画の作成」

の大きく4つである。

また、本訪問中に坂本さんからのアドバイスを頂いた。それをもとに、居酒屋てんの活動が終わってからメンバーで話し合い、フェリーターミナルに来られない人にまで目を向けて活動をする必要があると考えた。この時考えたのが、「居酒屋てんの宅配」と「北海学園なんでも隊」という2つの活動である。これら2つの活動は本訪問中に話し合い実行に移す事が出来た。

ここからはメイン活動と個別活動、それぞれのプロジェクトごとにまとめを行った。なお、「居酒屋てんの宅配」については「居酒屋てん」のまとめに、「北海学園なんでも隊」については「交流スペースてん」のまとめに含まれている。

本訪問一居酒屋てん

2年 齊藤百花

私たちは6月に宵宮祭に参加させていただき、自分たちでも天売島について調べ、観光売店の多くが閉まっていることや夜間に空いているお店がないことを知り、飲食イベントを通して島民や観光客と交流し、天売島地域自体のことや島民の方たちの生活について知りたいという思いから北海学園で貸していただいているてんのスペースを活用して6月ごろから飲食イベントの計画を行った。

目的やコンセプト、メニューなどをみんなで案を出しながら手探りで行っていたが、7月の賑わいプロジェクトに参加したことによって参考になる部分が多く店舗の様子や規模間もわかることができた。メニューも変更し、コップなどの備品や調味料、持ち込む食材を分担して購入し、多くは天売島の川口商店さんで購入し、大量の氷など売っていないものは羽幌町のコープで輸送してもらうことにした。川口商店さんには仕入れについて質問させてもらったりビールサーバーを設置してもらったりと多くの面で惜しみなく協力していただきとてもありがたかった。

現地についてはまずは活動スペース「てん」の整備を行った。コロナで数年使っていなかったてんのスペースを掃除し、持ち込んだ食材や道具など荷物の整理をし、開店に向けて島民の方の家にチラシを配りに行った。また、チラシは新聞の折り込みに入れていただったり、キャンプ場に貼ってもらったりなど多くの協力をさせていただいた。

実際に配布したチラシ



チラシを配っていた時に頂いたお刺身



天売島で花火が打ちあがることに合わせお祭りのようなイメージで行い、最終日の花火大会本番ではラムネやいちご削りのメニューを追加し子供たちだけでなく多くの人に楽しんでもらうことができた。

14日からはてんまで足を運ぶことが難しい方のために配達サービスも行った。てんのあるフェリーターミナル付近まで家の遠い高齢者の方なども多くいるので実行した。

居酒屋てんを通して、来年に活かすことができる多くの良かった点があったと思う。

まずは、島民だけでなく観光客の方もたくさん来ていただき様々な人とにぎわいながら交流できる場となった。学生それぞれがお酒を飲んだり、焼き鳥を食べたりしながら多くの人と話す中で天売島のことや島民の生活の一部も知ることができた。

また、7月の賑わいプロジェクトでは島民の方や島に来る人たちとの交流を目的としていたが飲食イベントの運営に必死になり交流が思うようにできず目的を見失っていた。しかし、今回はなにを目的に活動をしているのかを忘れずにメニューを減らすなどより目的にあわせ、協力してくれている島民の方や来てくださった観光客の方が楽しめるように改善できた。

そして、配達サービスはお世話になっている島民の方のアドバイスを受け、実行に移すことができた。配達サービスの利用数は少ない数だったが島の多くの方が配達のことについて知り話しかけていただき私達が島民の方たちになにか協力できることがあればしたいと思っているという意思が伝わったことが私たちの活動の目的だと感じた。

一方でてんの片付けが不十分であったことがあったので、このような活動をさせてもらっていることを忘れずに、その日の反省などもするべきことをしっかり行い、学生同士で助け合って改善したい。

また、何かをするために必要な経路や道具などを先に考え、これは難しいのではと思い込み諦めてしまう場面があった。配達サービスもアドバイスを受け、実行することができたので、今後は自分たちから率先してもっと柔軟に活動したい。

そして、一部のメンバーが調理や会計などの作業に追われ、島民とのコミュニケーションが少なくなったので、他の人と役割をローテーションしながら全員が満遍なく交流できるようにすることでより島の魅力や課題についてお聞きすることができるとおもった。

15日の花火大会



営業中の様子

本訪問—交流スペースてん

3年 原田悠里

本訪問では、2日目から6日目まで「交流スペースてん」として天売島のフェリーターミナルの奥にある「てん」で活動をした。「てん」とは、天売島にある空き店舗を北海学園大学で借りているスペースであり、過去の活動で内装などが整えられている場所である。この活動は、昨年度の活動で行った「交流スペースてん」をより発展させた活動を行いたいと思い企画した。

昨年度の活動について少し触れる。天売島の地図を印刷し島民や観光客、学生が思い出に残っているところや好きなところを書きこんで共有できるようにしてみたり、写真をでプロジェクターで映して共有したりできるようにするなどの活動を行った。また、現在の学生の活動状況をリアルタイムで更新した紙を掲示することで話すきっかけを作った。様々な人との交流のきっかけになった反面、学生と島民、学生と観光客という繋がりが多かったと思う。今年は、「島民・観光客ともにくつろげて交流が生まれる空間を作る」ことを目的とし、活動を行った。

昨年の活動を発展させたいと思い始めたが、昨年度と今年状況は違う点が多く単純には変えることができなかった。コロナ禍で空いていなかったフェリーターミナル周辺の売店も、フェリーが来る時間に合わせて開店しており、飲食物やお土産を変える前に買う事が出来る環境は整っていた。また、夜に居酒屋てんを行うため、昼間に行う交流スペースてんとの切り替えをどのように行うかも課題となった。

交流スペースてんのイメージとして、島を一周した後や島から帰る前、また日常の作業が終わり一息つきたいときに飲み物を飲みながら集まる場所であってほしいという気持ちがあった。そのため、当日はアイスコーヒーを提供する事とした。飲み物の種類や値段について迷ったが、居酒屋てんと交流スペースてんの切り替えを、来てくれた方とコミュニケーションを取りながら自然とすることにしたため、コーヒーも夜に合わせて有料とすることにした。品数については、近くに自販機や売店があることからアイスコーヒー種類とした。



結果、親戚をつれてきてくれる島民や、興味を持ってきてくれる観光客が多く、島民と観光客の間でも交流があったのが面白かったと思う。居酒屋てんが始まった後は、前日夜の売れ具合によって昼もジュースを出すなど、皆が楽しく集まれる空間になったと思う。しかし、親戚や家族などで来てくれたときどれくらいはなして良いのかと遠慮してしまったので、交流スペースであることをアピールしてより積極的に活動出来たらよかったですのではないかと。

またこの活動は、昨年度より多くの島民・観光客に来てもらえたものの、港まで来ることができると対象が限られていた。その点を協力していただいている坂本さんに指摘していただき、日中は「北海学園なんでも隊」を結成する事にした。計画を立てたのが4日目の夜だったため、5・6日目の2日間という短い期間であったが、たとえ成果として出なくても、何か動こうとしているという事を知ってもらい、来年につなげたいという思いで、島の各世帯に設置されている IP 通知端末を使いお知らせをしてもらった。

北海学園なんでも隊は、住民の願いについて大小関係なくできる事を行うという活動である。住民から学生の代表に電話をもらい、その内容が学生でできることであれば引き受ける。家の位置などわからないことがあったら、坂本さんが協力してくれると言って下さり実現することができた。実際に3つの願いを受けることができた。

1つ目が、自動販売機の商品入れ替えである。

2つ目が、島民の仕事の話相手である。

3つ目が、島での花火大会の片付けである。

これらの活動は、この1回の繋がりではなく、居酒屋てんで買ってくれたものを配達するきっかけになったり、来年もよろしくと言ってもらえたり、島民と関係を築くことができる貴重な体験であった。

昨年度のフィールドワークが終わった時点で、何か配達等を学生が出来たら面白そうなど話題には上がっていた。しかし、実際に行く前に活動出来る人数や実際に天売島であるサービスのことを考えてしまい、アイデアを共有して深める事はなかった。まずは良さそう、面白そうと思ったことをどうすれば、地域活性に繋がるような活動にできるのか考えていくことが大切だと思ったし、来年度は今年過ごして感覚的に思ったことを大切に、何をするか深めていくべきだと学んだ。



本訪問—アンケート

2年 西田亮太

観光客の方たちがどんな目的で天売島に来ているかを調査するためにアンケートを行った。滞在期間中、てんの前に立ち寄った方や、フェリーを待っている観光客の方たちに積極的に話しかけて回答してもらった。集まったアンケートの総数は29枚、道外10件、札幌9件、道内（札幌以外）10件。道外の多くは関東圏からの観光客が大半を占めていた。

アンケートの内容は最後の自由回答欄を含めた5つを用意しており、手軽にかつ大事な要点だけをまとめたアンケートを作成した。

第1に「天売島に来た目的はなんですか？」という質問。観光が9割を占め、残りの1割は島の親せきに会いに来た方だった。

第2に「天売島をどこで知りましたか？」という質問。ある方はSNSの旅好きのコミュニティの中で天売島が話題となっていたのでそこで情報を知った。他にはSHIMADASという日本の島を紹介しているガイドブックから情報を得たという方もいらっしゃった。この質問の中で、天売島は旅好きの中でも知る人ぞ知る島だという印象を受けたと同時に、一般の旅行客では天売島を知ることすらも難しいという印象も受けた。

第3に「島の観光スポットで良かった所は？」という質問を聞いた。この問いに対し、赤岩展望台、観音岬をはじめとする島の展望台各所と答える方が大半だった。

4つ目の最後に「天売島にあってほしいもの、場所は？」について質問した。コンビニや温泉を求める声など実現が難しそうな意見が最も多かった。次に多かったのは星空を見るイベントや日の出を見るイベントの開催を求める意見。（星空を見られるイベントに関しては以前、天売島おらがしま活性化会議の方々が行ってたそうです。しかし人件費や夜限定かつ天候に左右されるイベントのために運営が難しいので現在は行ってない。）こう言った意見から、天売の自然を存分に楽しめるイベントがもっと欲しいといった印象を受けた。そしてこのような要望とは反対に、離島ならではの良さを壊さずに大きく変わらないで欲しい、現状維持の意見も10数人から回答をいただいた。

今回この企画を実施して、アンケートの結果の興味深い結果だけでなく、観光客の方とそこで会話がしたり、夜の飲食イベントに来ていただいたりと、コミュニケーションのきっかけになれたことが良かった。今年は実験的に観光客の方にアンケートを取ったが、来年は島民の方に向けた本格的なアンケートの実施を考えている。今年の実践を踏まえ、回収率の高い、来年度以降の活動の基盤になるような情報収集をしたいと考えている。



交流スペースてんでの
アンケートの様子

本訪問一高校調査

3年 高見海晴 2年 山本幸一 西田亮太

まず初めに、天売高校について説明をする。北海道天売高等学校は普通科定時制の高校で昼間はだいたいの生徒が働き、夕方から学校に登校するスタイルの学校で全校生徒数は17名と、少人数な学校である。また授業としてタコやウニを燻製、缶詰に加工する「水産実習」や天売の歴史や文化について学び郷土愛を育む「天売学」といった天売高校ならではの授業が行われている。



天売高校校舎

6月に訪問した際に出会った天売高校卒業生の笹熊輝君とのコミュニケーションをきっかけに高校に関わるプロジェクトを考えた。笹熊君は入学したきっかけが自分を変えるために天売高校を選び漁師を目指すということと話していて、きちんとした目標があり努力しているのが聴いていて伝わってきた。そして、天売高校について調べた際に島留学で地方から来ている生徒がほとんどであったことから、これから進学先を考えている学生に笹熊君や他の生徒の学校生活や将来の目標や展望を知ってもらえれば天売高校、そして天売島に興味を持つ人が増え、生徒数の増加が期待できると、卒業生が大人になったときに天売島の地域おこしの一員として貢献できる人材になる可能性があると考えたからだ。そこから、笹熊君も含め天売高校の良さを伝えるにはどうすれば良いかを考えた。アイデアとしては動画を撮影しながら1日に密着してメディアを使って宣伝するといったものがあったが、お互い緊張せずに話せるように「普段どのような生活をしているのか」や「今後の進路や将来」についてのインタビューを8月の本訪問の際に生徒や卒業生に行いその内容を記事にして学校のパンフレットに掲載し、パンフレットを観た人達に天売高校を身近に感じてもらおうと考えた。

そこから、パンフレット掲載に向けて高校から許可をいただくためと、天売高校のことについてより知るために7月の賑わいプロジェクトで訪問した際、教頭先生とお話をさせていただくことができた。自分たちの取り組みについて教頭先生について説明すると、パンフレットに掲載するのであれば企画書を提出してほしいとのことであった。

企画書の提出は大学の期末試験や本プロジェクトである飲食イベントで忙しくなってしまう時間がなく断念することにした。そこで、まず今年は、8月の本訪問の際に島民の方々からの視点で天売高校の印象や実際に思っていることについて聞いてみることにした。

島民の方々に高校について聞くのは先ほど紹介した、昼や夜のとんの際に聞こうと思っていましたが羽幌町観光協会の平野さんのサポートもありお話を聞ける機会を設けることができました。聞くことができたのは、レンタルサイクルの森脇さんと天売高校の寮長で

ある川村さんにお話を聞かせていただくことができた。

今回高校の調査にあたって生徒、先生、島民の天売高校に対する様々な思いや意見が聞けて高校の実態が理解できた取り組みでありとても貴重な経験であった。来年も同じような取り組みを行うのであれば、天売高校のパンフレット掲載に向けた企画書を作る。または、天売島の魅力と天売高校の魅力を含めた記事を WEB マガジンなどで掲載していただき認知度や魅力度を高めることを実践するのが現実的であると今回の経験を通して考える。

本訪問—PR 動画の作成

3 年佐藤旭、2 年大弓叶多

TikTok : 大弓叶多

今年度、私は天売島内にて動画撮影を行い、PR 動画を作成した。この活動の発端は、天売島が本土から離れているため、大きな都市や主要な観光地と比較して、天売島の名前が特に若年層にはあまり知られていない可能性があることに着目して生まれたものである。そこで、今ある天売島の資源や景観、特に赤岩や観音岬などの絶景を撮影し、その魅力を動画投稿アプリである「TikTok」に発信することで、この問題の解決の一環として貢献できるのではないかと考え、本活動に至った。

今回、TikTok に着目した理由は、情報を得るために検索を行う必要が少ないからである。天売島の名前を知らない人が、インターネット上で天売島について検索することは難しい。しかし、TikTok にはおすすめフィード機能があり、ユーザーの興味に合わせた動画が流れる仕組みであるため、景色が好きな人であれば、誰でも閲覧する機会があり、フォロワー数や人気度に左右されない点が TikTok を選んだ理由である。

さらに、自身の TikTok アカウントには専用の QR コードが割り当てられており、スマートフォンのカメラを使用して QR コードを読み取ることで、相手は簡単に TikTok アカウントにアクセスすることができる。この機能を利用して、他のソーシャルメディアやメッセージングアプリなどにも共有することが可能であり、他のプラットフォームでも簡単に繋がることのできるものである。



↑ 今回の活動で使用した
TikTok アカウントの QR コード



撮影で使用した機材

また、TikTok の動画は数秒から 1 分程度の短いビデオ形式であり、視聴者が飽きずに視聴できる。この形式は独自のコンテンツを比較的簡単に作成することができ、動画の本数を増やすことで視聴の機会を増やせると考えた。

事前訪問を含めた 6 月、7 月、8 月という夏の期間に、私は 3 回の訪問を通して天売島を巡り、様々な撮影スポットを見つけ、試行錯誤を繰り返しながら撮影を行った。撮影方法は、レンタサイクルを利用して島を一周しながら、気になったポイントで撮影を行う方法であり、島を巡りながら魅力的な風景に出会い、臨機応変に撮影することができた。また、気象条件によって景色が変わる天売島では、天気や時間帯によって異なる表情を見せてくれた。そのため、島を訪れるたびに島の異なる側面や新たな魅力の発見があり、赤岩や観音岬だけでなく、島全体を回ることによって事前の情報では知り得なかった景色を捉えることができた。これらの経験から、天売島の存在を知らない方やまだ訪れたことのない方に向けて、動画を通じて天売島の魅力を伝えたいと考えている。



自転車を借りて素材集め



島内のフットパス

YouTube:佐藤旭

私が天売島での活動に YouTube 撮影を選んだ理由は、天売島内の食べ物や風景を撮影することで、ネットの情報や写真の情報では伝わりにくい島の雰囲気を知ってもらうことに繋がり、島の PR 活動になり得ると考えたからである。

また、Youtube は Tiktok とは異なり、主に 10 代から 50 代の幅広い年齢層の方が利用しており、キーワードを入力することで、簡単に天売島の動画を視聴することができるため天売島に興味を持っている方や、島巡りを趣味とする方へ向けて、天売島の魅力が伝わるような動画撮影を行いたいと考えた。

7 日間過ごした中で、天売島は非常に心地良く、時間の流れが遅く感じた。この魅力を動画に映し出すことを意識しながら撮影に臨んだ。そこで動画づくりの難しさや、撮影に協力して下さった島民の方々の暖かさを感じることが出来た。

チャンネル名：佐藤旭



動画のオープニング映像



天売島の日没風景を
タイムプラスで撮影した映像

本訪問を踏まえて

私たちは地域協働フィールドワークとして、天売島へ訪問し、各グループによってさまざまではありましたが、私たちの大きな目的として「島の人たちのために出来ることをやりたい」ということがありました。その結果、各々が活動していく中で多くの島民の方と交流させてもらい、私たちがこの訪問を踏まえ、感じたことを報告させていただきます。

多くの島民の方とお話をする場面が多くあり、その中で聞いた話から今まで自分たちが考えていた地域活性化と島で必要としている地域活性化は考え方が違うのではないかと思います。島の人たちが必要としている地域活性化とは、その地域をただ大きくすることではなく、既存の資源やコミュニティを最大限発揮し、島民だけではなく観光客からも島が魅力のあるような場所として思ってもらえるようにすることが重要なのではないかと考えました。

地域活性化について改めて考えた上で、来年に向けて地域協働フィールドワークとして検討している活動は、島の雰囲気合うような活動を島の方と連携しながら実行することや、今回の活動の中心となっていた「てん」に年齢等の事情で来られなかった人たちとも積極的に交流することや、誰も取り組んだことのないような新しい活動をしていきたいと考えています。

また、毎年2回しか訪問できないことをしっかりと意識し、1度の訪問を大切に活動を進めたいと考えています。



配達の様子



本訪問終了後のお見送り
(船からの景色)

おわりに

今年度の活動は、3年生3人、2年生4人の計7名で活動を行いました。4月にメンバーが揃った時点では、地域協働フィールドワーク1年目6人、2年目1人という中で、どのように活動を進めれば良いか不安が大きかったです。しかし、1年目の皆も学年関係なく会議の司会をしてくれたり、議事録を取ってくれたり、メンバー全員で活動を進めていくことができたのではないかと感じています。

昨年度はコロナ禍の影響もあり、個別プロジェクトがメインで、島の人が学生の活動を感じることができるように「てん」を拠点として行動していました。その結果、地域「協働」フィールドワークという講義名に対して個人活動が多かったという反省が出ました。その反省を生かして、今年は「居酒屋てん」をメインプロジェクトとして置き、メンバー全員で「協働」することができたと思います。

一方、個別プロジェクトも残しました。それぞれが2年間積み重ねることができる活動を行いたかったからです。私は学生の拠点としての「てん」を今年もつくることができました。他の学生も5月のミーティングで天売島について調べたことや6月の事前訪問を踏まえて、それぞれの興味に合った活動をする事ができたのではないかと感じます。メインプロジェクトの打ち合わせで精一杯になってしまい、行き詰った時期もありました。そんななかでも、メインだけに絞ることなく本訪問を迎えることができました。振り返ってみるとそれぞれの活動がお互いに良い影響を与えあえるものになっていたと感じます。

様々なプロジェクトを通して、天売島での生活を支えている仕事が見えてきました。島にある自動販売機は誰が補充しているのか、綺麗なトイレを保つために毎日清掃に来ているあの方は誰なのか、ゴミを収集している人は誰なのか、羽幌で購入して配達してもらうものはどのように島民の手に届くのか、島民はどのように仕事をしているのか。思い出せばきりが無いほど生活を感じる事が出来ました。私は昨年度も地域協働フィールドワークを受講しましたが、昨年度にはなかった深い繋がりでした。今年だからこそ感じる事ができた思いを来年度に引継ぎ、積み重なっていく活動をしていけるように尽力していきます。

最後になりますが、本活動のメンバーは基本2年の活動となっています。また、天売島への訪問も1年に2～3回のみと少ない機会です。そのなかでも、島民の皆様、関係者の皆様に沢山のサポートを頂いていると強く感じ、感謝の気持ちでいっぱいです。来年度以降もご迷惑おかけすることもあると思いますが、学生間で共有できることは共有し、よりよい活動を目指し尽力いたしますので、今後ともお力添え頂ければ幸いです。

2023 年度 北海学園大学地域協働フィールドワーク
経済学部地域経済学科3年
原田悠里